

いのちの始まりの生命倫理

――危機の時代の生命科学与宗教文化――

島 蘭 進

1. 人間の終わり？

最近、いろいろ生命倫理関係のニュースが多くなっています。私が一番気になっていいるニュースの一つは、子宮がんを患ったある女性が結婚しまして、子宮がんですから妊娠できません。そこで、「体外受精」をして、それをがんのお母さんのお母さん、つまり子どもにとつてはおばあさんが妊娠をした。そして、五十何歳で子どもが生まれた。これは「代理母」であります、こういうことが可能になりました。いまのはがんで子

宮がない方の話ですから、やむを得ないのかもしれませんが。しかし、これを一旦認めると、どこまで許せるのか。本人の体で生めないから、それならお母さんが生むということになると、次には、「自分は忙しい。いま仕事しているのでとても仕事を休むわけにはいかない」という方も認めることになる。そうすると、大体みな、二十代、三十代の方はお忙しいから、子どもはみんな五十代ぐらいの人が生む（笑）。まあ、こういうことになるのではなからうか。けさのテレビを観ましたら、子どもがなかなか生めないという若い女性が多

いですが、その理由は経済的に難しい、忙しくてなかなか子育てできない。しかし、三番目の理由に、「痛いのて怖い」というのがある。お腹を痛めるという言葉があります、しかし、いまはお腹を痛めなくても子どもが生める。それどころか、人に頼んで生んでもらうということが出来る。しかし、もしそういう社会になったら母と子の関係はどうなるのだろうか。こんなことが非常に心配です。

似たようなことは他にもあって、医療技術が開発すれば長寿が求められるようになります。長生きできる薬ができ、細胞の中の老化を進める要素を止めて、いまはせいぜい九十歳ぐらいまで生きていけば、「ああよかったな、本当に天寿を全うしたな」ということです。将来は百三十歳の時代が来るかもしれない。そのとき、いまでさえ高齢化社会で困っているのにどうなるんだろうか。こんなことが心配です。

あるいは、体外受精をすると、着床前診断といって、受精卵が幾つかに分かれたところで一つ採ってきて、それを調べて、たとえば男か女かを見てどちらかを選

ぶ。残りの卵から子どもは育ちます。うちはどうしても男がほしいというと、男の子を生むと。こういうことも起こってきます。いま、男のほうは女性百に対して百十から二十だという国が幾つかあります。体外受精になると、子どもも好きな子を選んで生める。こういう子を生みたい、知能の高い遺伝子をもった子を生める、こういう病気になる子は生まないでいきたい。デザイナーベビーといいますが、すでに体外受精をするときに人の精子を借りてくる、人の卵子を借りてくる。その人の様々な特性、私は八頭身ですとか、そういうのが値段になる時代です。日本ではそういうことはいま許されていませんが、先ほどの代理母は産婦人科学会では禁止していますが、法律では禁止されていないので、諏訪の病院の根津八紘先生という方が、「自分はこのことによって、このお母さんを救うのだ」という信念のもとにやった。

人類、あるいは日本国民がどこまでこういうことを認められるのかということを考え、決めていかなければならない非常に難しい時期に来ているということ

す。すでに、脳死・臓器移植で日本は国論が分かれま
した。国会でも新たにそういう問題が出てくる。いま
のままで日本では臓器移植は非常に少ないので外国
へ行ってやる人が多い。そうすると、外国の人もほし
いけれども、日本人のほうがお金を持っているので優
先的にできるという大きな問題が起きます。だから、
もっと日本でも臓器移植できるようにしようという声
も強くなる。

こういうふうに、あらゆる問題が噴出してあります
が、たとえば、子どもを生み分けるとか、長寿がどん
どん進んでいくとか、お腹を痛めないで子どもが生ま
れるということになると、いままでも人間が人間である
ための条件だったことが根本的なところで変わってき
てしまう可能性があります。これが、「人間の終わり」
ということがいま議論になっている理由です。こうい
うことは、この十年ぐらい急に深刻になってきました。
しかし、もう何十年も前に、こういうことを予言する
人がいた。一九三二年にオルダス・ハックスリーとい
うイギリス人の小説家が『すばらしい新世界』(Brave

New World)、という小説を書きました。すばらしい新
世界、これは皮肉です。

この小説の中では、すべての子どもは試験管の中で
つくられる。そして、子宮も使わないで済む、全部外
でつくる。ですから、セックスはするけれども女性
は子どもを生むということはしない、それは外でやる。
そして、初めからその子どもは五種類ぐらいに分かれ
ていて、全部階級が違う。立派な受精卵の人から一番
低い受精卵の人まで初めから別で、その試験管を揺ら
す揺らし方から違う(笑)。人間を全部工場でつくるわ
けですが、そのやり方が違う。もちろん、生まれてか
らの運命が全部そこで決まっているわけです。そして、
生まれてからの人生は、とにかく人は苦しまない。何
か悩みがあると、その悩みがなくなる薬、ソーマとい
うのですが、気分がよくなる薬というのを人々がほし
くなる。そういう社会を描いてあります。

ハックスリーはそういう社会で、人間はまだ人間と
言えるのだろうかということを問うているわけです。
ある種の容易ならぬ危機を感じて人類の未来を憂えて

いたということです。このころ以降、ナチスが精神障害者を殺したり、日本でも精神障害者は子どもを生めないようにするということが行われて優生学が勢いを増していきます。悪い遺伝子をもった人は排除して、人類はどんどん変えていけばいいんだという考えです。そういう考え方は、ナチスが負けて、戦後、人類は捨てたはずですが、いま、あらためてその考え方を認めざるを得ないのではないか考える人が増えてきています。一人ひとりがもつといい子を生みたいという、それを拒否する理由はないのではないかと議論が力を強めており、これを新しい優生学といっています。その優生学というのができたのは十九世紀の終わりです。ハックスリーがこの小説を書いた時期は優生学が発展途上にあり、それへの期待が強かった時代ですが、そういうことを進めていったらどうなるのだからかということを彼は非常に憂えていた、一種のSF小説です。SF小説ですが、いまから見るとあまりにリアルなですごいなと、我々自身が真剣に省みなければならなくなっている。

レオン・カスという人がいますが、この人はブッシュ大統領がつくった生命倫理委員会の座長です。もと生命科学者でしたが、哲学に転じた人で、こういうハックスリーの恐れは重要なんだ、我々は本気でこれを考えなければいけないのだと主張しています。ブッシュ大統領は、キリスト教のファンダメンタリズムというのに近く、真剣にキリスト教の立場を通そうとしている。もしかすると、イラクと戦っているのもキリスト教の立場からイスラムを叩くという意思があったのではないかと疑われている。二〇〇六年の選挙で負けたのは、そういうブッシュ大統領の背後にあるキリスト教の原理主義がやや人気を落としたということが関係しています。そのブッシュ大統領はキリスト教の立場から、こういうふうに科学が進んでいくと、人類が人類である理由、命が尊いという感覚、いわゆる人間の尊厳といったようなものが失われてしまうのではないかと憂え、新しい生命科学の研究を制限する方向の委員会をつくりました。そのリーダーが、このカスという人で、独自の見識をもった哲学者です。

この方がこういうふうに言っています。ハックスリーの『すばらしい新世界』に出てくる人間は健康で幸せかもしれないが、もはや人間ではない。戦わないし、野心を持たない。愛さない。痛みを感じない。困難な労力のいる決断をしない。家族をもたない。伝統的に人間がされてきたことを行わない。人間の尊厳となる特徴をもたない。人類という種に当たるようなものは存在しない。支配者によって教育され、アルファ、ベータ、ガンマ、デルタ、エプシロンと五つぐらいの階級に分化されている。この諸階級は人間と動物の違いと同じぐらいそれぞれが全く別のものである。もし、そういうふうに着目の、この人たちの遺伝子とあの人たちの遺伝子は違うということになると、いまこの人たちは、あの人たちと言っていますが、同じ人間種だという意識が薄れてしまう。

そういうことがすでにこの一九三二年の本の中で書かれていた。しかし、いま我々はそういうところに近づいているのではないだろうか。そういうことをカスは憂えていて、かなり厳しい先端生命科学への制限の

方策を提言しました。これにはアメリカの生命科学者が猛烈に反発して、二〇〇六年の中間選挙の最も重要な火種の一つになりました。民主党が勝ったなかには、こんなふうに生命科学を制限されては、いま困っている病人たちが救えなくなるのではないか、こういうキヤンペーンが民主党側にあり、それが成功したということもあるのかと思います。

いまレオン・カスという人の名前が出ました。ユダヤ人の哲学者ですが、これまた高名なアメリカの日系人、フランシス・フクヤマも生命倫理問題に取り組んでいます。この人は『歴史の終わり』という、共産主義が負けたことによって人類はいよいよ理想社会に近づいたのだという本を前に出して世界的にヒットした人です。しかし、今度は『人間の終わり』（ダイヤモンド社、二〇〇二年）という本を書いた。原題は*Our Posthuman Future*です。ヒューマンが人間ですから、人類以後の社会に我々はいま入ろうとしているのではないか、こういうことを彼は憂えているわけです。この人も、レオン・カスの生命倫理委員会のメンバーでありました。

「歴史の終わり」と言っただけでも、科学がどんどん進む。そうすると、人間がいままでのように同じ人間としての意識をもつことができなくなってしまうかもしれない。人類社会が、もう一回新しい危機に会おうのではないかということを言っています。

また、ユルゲン・ハーバマスというのはドイツ人で、いま世界で最も名高い哲学者の一人ですが、この人も似たような主題で、本気で人類の危機について説いています。この人の議論は、生み分けに對する、つまり、この人は障害がありそうだと生まない、この人は糖尿病になる遺伝子があるというと生まない、このようにある種の人たちを排除していくことが認められるようになったらどうなるだろうかと問うています。何がおかしいのだろうか、それを考えなければいけない。もしかすると、人間社会が成り立っている、いまままでこれでこそ人間社会だと信じる基盤となっていた根本前提が変わってしまうのではないだろうかということです。

これは難しい議論をする哲学者が言っているだけで

はなくて、映画などでも取り上げられている。二〇〇五年に作られた「アイランド」というハリウッド映画があります。要するに、お金持ちの人が病気になるたびに、その人に臓器や体の組織を提供するためのコピー人間を地下世界で養っているわけです。そして、いよいよ必要だというときに地下世界の人を殺して、その人の臓器を金持ちに移植する、そういう設定になっています。地下世界にいる人は選ばれるときに、「理想の島へ行くために、きょうこそあなたは選ばれたのです」と言われて、喜んで連れられて行くと、実は殺されて、その臓器を取られる。とても怖い映画ですが、一種の臓器工場みたいなものです。そして階級があつて、上流階級の人の医療のために下層の人は犠牲になるという世界です。これはハックスリーの世界とすごく似ています。そして、現在起こっていることに何か通じるところもあります。

いま医療がどんどん差別化されていって、お金がないと受けられない医療が増えていきます。国民健保をちゃんと払っておかないと医療サービスが受けられな

い。アメリカではお金がないと保険がない。私の学生だった若者のカップルで、アメリカで映画の修行をしたり、ダンスの修行をしている人がいますが、ニューヨークに訪ねて行くと、彼らは保険に入っていない。「病気になるたらどうするんですか」と聞いたら、「寝ています」ということでした。医者に行けない。それが日本でもそうなりつつある。このように医療サービスがますます差別化していく傾向にあります。そういうことが、アメリカでは日常的に起こっているということです。

こういうことが急に進んでいくような兆しが目立つようになったのは、クローンということが関係しています。トカゲは尻尾を切るとすぐ再生してきます。あれは尻尾だけです、体の一部があれば元の体ができるということが、小さな原始的な生物ならあり得るわけです。それを何とか複雑な生物にも使おうということで、クローンの実験が行われました。「クローン」というのはもと「接木」です。体の一部をどこかへ差せば、そこから元の体ができてしまう。高等生物で

は、卵子から核というのを抜いて、そこにある人の体の細胞の核を入れると、入れた人の体ができる。受精卵ではなくて、卵子。卵子というのは女性しかないのですが、これは素晴らしい力をもったもので命の元です。精子だけでは決して子どもが生めないけれども、いまや精子がなくても卵子で子どもが生めるようになった。単性生殖ができるようになった。少なくとも、羊ではできるようになった。もし、羊でできるのなら人間でもできるのではないか。一九九六年にスコットランドの学者がこれをやりまして、九七年に、そのニユースが入り大変な衝撃が世界を走りました。

このクローン技術を人間に使っていいのだろうか。いろいろと利用のしがある。うちは不妊だ、父親の精子がうまく働かないという場合に、奥さんの卵子をもってきて、そこにお父さんの普通の元気な細胞を取ってきて入れる。そうすると、お父さんの遺伝子をもった子どもが生まれる。一卵性の双子は同じ遺伝子組成をもった二人の人間ですが、同じ世代です。しかし、親子でそれができることになる。こういうことを

していいのだろうか。もし、していいのだとなったときに、男は非常に困ります。女だけで子どもが生めるという社会になる。これは冗談ですが、しかし、そんなことが問題なのではなくて、そのようなことが広まったら親子とは何か、両親がいない子どもとは何か、などという問題が生じてしまう。もちろん、いままでも親が分らない子どもはいます。しかし、それは特別な場合であり、何となくそうとしてきたことだったのですが、ごく普通にできるようになっている。

いまでも、すでに、結婚しないけれども、人の精子をオークションでもらってきて子どもを生むという女性性はアメリカにはあります。そういうことが、もともとと進む。クローンの子どもの作ることを認めるのは世界中の指導者が非常に危険だと考えて、いまほとんどの国ではこれを禁止しています。しかし、クローン技術はいろいろ別のことに使える。その中に移植用臓器の作成というのがあります。いま心臓が悪くなったり、肝臓が悪くなると、臓器移植をするしかないです。死んだ人からもらうというのが脳死・臓器移植で

すが、なかなか日本ではできない。それで、生体間移植というのをやります。つまり、生きている人からもらう。国会議員の河野洋平さんの息子の河野太郎さんが自分の肝臓の一部をあげて河野洋平さんは助かった。これが、生体間移植です。しかし、親子であっても遺伝子の組成が違いますから、そうすると拒絶反応があります。したがって、免疫抑制剤を飲まないといけない。免疫抑制剤を飲めば別の病気にかかりやすいということで、臓器移植というのは非常に辛い治療法です。レシピエント（移植を受ける人）も苦しい。臓器を提供した人も「本当にそれで（自分は）大丈夫なのか」ということも確信がもてないです。十年、二十年、三十年ぐらい経って、やっぱり臓器をあげたのが原因なのかということが起こらないか心配です。

ところが、クローン技術を使うと、まだそれができるめどがたっているわけではありませんが、人間の臓器を作ることができる可能性がある。その前に、人間のクローンをつくって胚の段階——小さな受精卵の段階を「胚」といいます。胎児のもっと前の段階。その

胚の中からES細胞を採ります。万能細胞というのですが、胚を壊してES細胞を採り、それをたとえば豚に入れて成長させる。そうすると、豚の中で人間の肝臓をつくる、心臓をつくるということが可能かも知れない。一九九八年にアメリカで初めて人間のES細胞というのが採れました。これで人間のクローン胚の作成が可能になれば、特定の人の細胞をもとにしたクローン胚からその人の遺伝子をもったES細胞が採れるかもしれないということで、経済界、科学者は大いに盛り上がりました。こういうのを「再生医療」といいます。体の弱くなった部分を再生させる。もしそれが可能になれば、大ていの病気は治る。特に臓器の交換というのが容易にできるようになる。そして、この医療は拒絶反応がない。自分の遺伝子をもった臓器を補充できる。

さっきの「アイランド」という映画は動物にそれをつくらせるのではなくて、人間につくらせるという悪夢を描いていたのですが、「動物なら大丈夫じゃないか」、「こういう考え方もあるわけです。ですから、再生

医療、傷んだ臓器や組織が蘇る、こういう可能性があります。いまは、体外受精の際に余った受精卵からこれを探るのが認められています。しかし、クローン胚から採るといいうのができると、自分の遺伝子をもったES細胞というのが採れるわけです。拒絶反応のない組織を自分のためにつくることができるといいうこと、自分の体を自分の体の外で部分的につくることができるといいう可能性が出てきました。

国や企業は大変なお金をかけてこの領域に乗り出そうとしています。こういうことが報じられると、こういうふうな技術を使えば人間は次々に欲望を実現できる。病む者にとつて理想の医療ができるだけではなく、もっと幸せで有能な人間をつくることができる、こういう議論をする人たちが出るようになった。たとえば、『複製されるヒト』（翔泳社）を書いたリー・M・シルヴァー、『それでもヒトは人体を改変する』（早川書房）を書いたグレゴリー・ストックといったアメリカの生命科学者です。クローン胚とかES細胞とかいう技術が開発されていますが、それをさらに進めて、遺伝

子治療、遺伝子を変えろということまでいけば——これも少しずつはもう行われる可能性が見えてきているわけですが——人間改造が自由に行えるようになる。動物では、もう行われています。それを人間にも適用するようになれば、がんになりそうな遺伝子を取って、代わりにがんになりにくい遺伝子を入れる。記憶力がもうちょっとという人の遺伝子を取って、「記憶力抜群」という遺伝子を入れてあげる。こういうことができるようになる。シルヴァーという人は、人類がもしこういうことをやっていけば二種類に分かれるであろう。つまり、「遺伝子を改造した人間」と、「遺伝子を改造できない人間」です。できない人間はナチュラル (Natural) という。遺伝子を変えたほうの人はジーン・リッチ (Gene Rich)。ジーンというのは遺伝子のことで、「遺伝子が豊か」。そういうふうに人類は分かれるであろうと。それはよくないことかということも彼らは議論しない。止めなきゃならないかということも議論しない。そして、できる、止められないだろう、やりましょうというふうに彼らは言っております。

いま起こっているクローン胚の問題からES細胞の問題、これは「いのちの始まり」の段階を利用するということです。それで病気を治してあげようということですが、たとえば、事故で脊髄損傷した方が車椅子が不可欠になる。この方たちが、こういう科学技術を使うことによって治るかもしれない。パーキンソン病も、この医療を使えば比較的早く治るようになるかもしれない。アルツハイマーも治るかもしれない。小児糖尿病というのも治るかもしれない。希望がふくらみます。しかし、もしこういうことを進めていけば大きな問題が起こる可能性もある。

そもそもまず、クローンの胚をつくるということは人間をつくるということです。子どもを生むのではなくて、子どもの元々を、何かに利用するためにつくる、手段としてつくる。そして、それを壊す。つまり、殺す。米粒にもならない小さな段階で、人間の生命から材料を採ってきて利用する、これがヒト胚利用です。事故や病気でこれだけ苦しんでいる人がいる、何とかしてあげたいというときに、人から卵子和精子をもら

ってくる。あるいは卵子にクローン技術を使ってクローン胚をつくる。すでに体外受精のときに余った受精卵というのがあちこちに冷凍されていて、それはただ捨てるだけになっています。これは一応、世界の多くの国で利用していいということになっています。それなら、新しく受精卵をつくったり、クローン胚をつくったりして、それを何で利用してはいけないのだろうかというのがいま世界中で議論していることです。

2. 日本のヒト胚利用審議の失態

日本でも、その議論が一九九七年から二〇〇四年まで続きました。私は、それに加わっていました。その過程で、「クローン技術規制法」(二〇〇〇年制定、翌年から施行)というのができました。しかし、これは非常に中途半端な法律です。この段階では、まだクローン胚をつくるということは認めていない。非常にあいまいな表現になっていますが、少なくともイエスとはなっていない。それで再生医療に関わる生命科学者、それを押そうとする産業界、そして政府は、何とか世界の

最先端の国々に伍して、こういう技術を日本でも始めたいという意思がありました。しかし、いのちの始まり、その段階のいのちを犠牲にしたり、それを利用したり、そこから生じる危険のことを考えずに、いま競争に勝つために、そして、とにかく救われなければならない人がいるからという理由で進めていいのだろうかという議論が続きました。

これをいまだに進めている国はイスラエル、シンガポール、中国——中国はどこまでいっているかわかりませんが——韓国、イギリス、です。韓国は、二〇〇四年二月にソウル大学の先生が「成功した」と言いました。人間のクローン胚からES細胞をつくるというのは、実はまだ誰も成功していません。多くの国では禁止していますが、韓国は比較的こういうことに対して緩やかな国です。代理母も韓国ではかなり自由に行ける。だから、日本から中国へ行ったり韓国へ行ったりして、あるいはアメリカへ行ったりしてやっている人がいると思われる。韓国で制限が緩やかな一つの理由は、韓国は「どうしても男の子がほしい」とい

う女性の意思が強い国なので、そういうことが関係して体外受精というのが非常に盛んです。

このES細胞成功のニュースがあつて日本は非常に焦った。「韓国でもうできたのだから日本も始めなくては」と。単にこういうことができてちょっと早いというだけではなくて、一つの技術が開発されると特許が取れます。そうすると、莫大な経済的利益が得られる。そして、それによって科学研究の投資をしますます発展する。ですから、国運を賭けている問題です。国益に非常に深く関わっている。韓国がやっているのに、どうして自分たちの国はできないかというのはアメリカの議論でもち出される論拠です。

実は、これは「ウソ」だったということがわかった。二〇〇五年にもつくつたというニュースが出ましたが、実は全部ウソだった。韓国の人と話すと、あんなひどいことがあるとは思わなかったということです。実はまだそれほど問題にされていないことでもう一つ重要なことがある。というのは、この実験を成功させるためには女性の卵子が必要なわけです。一つのES細

胞、クローン胚からのES細胞をつくるためにどれぐらいの卵子が必要か。このファン・ウソク教授は二十以上の卵子を採った。体外受精をやったことがある方ならご存じだと思いますが、排卵誘発剤を使って卵子を出すということは、女性にとっては非常に負担がある。病気になる人もいるし、亡くなった方もいる。ボランティアで提供したというけれども、ファン教授の圧力を感じやすい研究仲間の女性関わっている可能性がある。これも重要な問題です。日本でも、クローン胚作成・研究の妥当性をめぐって論じられた一つの大きな問題は、こういうことを一度認めるようになる。女性から卵子を採ることが広く行われるようになる。しかもお金がからんでくる可能性が高い。要するに、卵子を売るといこともおそらく起こるであろう。そういうことを認めていいのかという問題があります。

国連でもこの問題を議論しています。「クローン人間をつくつてはいけない」だけではない、「クローン胚の利用も禁止しよう」とする国が、アメリカ、イタリア、

ドイツ、スイス、メキシコ、ハンガリー、クウェート。それに対して、「いや、それは禁止しないで各国の自由に任せよう」と。つまり、研究をもう進めてもいいんだというのがイギリス、フランス、スペイン、デンマーク、オランダ、ベルギー、日本、中国。どっちかというかとカトリック系の国が反対。イスラム系は分かれています、どっちかというとは反対。アジア、特に東アジアは賛成という立場です。

こういう問題を日本で議論するシステムが政府のもとにあります。総合科学技術会議という組織がありまして、これは首相に直結している。総合技術会議の議長は総理大臣です。しばらくの間は小泉さん、いまは安倍さんということになります。そして、その中でいろいろな調査会をつくって議論をする。そこで、私も生命倫理専門調査会の専門委員となって議論に加わったということです。

そして、二〇〇四年七月に報告書が出ました。一応イエスということになりましたが、しかし、その決め方はとてもいい加減なものでした。私はこれに立ち会

いましたが、強行採決が行われ、その日だけ出て来た委員というのがいるという状況でした。

一番厳しく批判していたのが毎日新聞でこういうふう言っています。「そのまま育てば人間になるヒトの胚をどう扱うか。3年にわたり議論を続けてきた政府の総合科学技術会議生命倫理専門調査会が、最終報告をまとめた。人の生命や人権にかかわる重い課題である。その重さに比べ、報告書の中身はいかにも軽い。

最終報告はヒトクローン胚の研究目的での作成と利用を認めた。この胚を使うと拒絶反応のない再生医療が実現するかもしれない。そうした患者の期待に応えることが容認の根拠だ。期待の一方で、クローン技術を使うヒトクローン胚研究には懸念がある。だからこそクローン技術規制法に基づく指針で禁止されてきた。にもかかわらず、解禁の科学的根拠も倫理的根拠も、報告書には十分に示されていない。最終報告は、生殖補助医療研究のためにヒト受精卵胚（ヒト胚）を作ることと認めた。しかし、こちらも、容認の根拠は不十分だ」

（二〇〇四年七月十五日付社説）

研究のために子どもの元、受精卵をつくっていいのか、ということも問題にされました。というのも、いままでは禁止でしたが、それを今度認めることにしたのです。そもそも今回の意思決定の仕組みそのものに問題がありました。調査会の上部組織である総合科学技術会議は科学振興を任務としています。科学を振興する会議なんです。とにかく科学技術振興大綱みたいな政策文書があつて、その中で議論をしろということなんです。世界に負けない科学技術立国にしなければいけないという枠の中で議論しようということなので、そもそも「進めましょう」ということが初めから前提となっていました。

そして最後は、強行採決。こういった採決があることを知っていた委員と、そうでない委員がいた。三年間真剣に議論したのは、主に少数意見を出した慎重派の委員だったことも最終決定を納得しにくいものになっています。私どもは少数意見を出し、まだ十分にこれを進めていいという議論になっていないということを言いましたが、医学者を中心に押し切られてしまった。

どういう人が委員になるかというと、総合科学技術会議の議員、これは主に科学者です。そして、生命倫理専門委員会の委員が指名され、私もその一人でしたが、他の委員の方々の多くが医療関係者でした。しかし、この人類社会の行方に関わりが大きい問題を、医学の専門家中心に議論していいのだろうか。医学者たちは「いや、医学の知識のない人にこういうことは議論できない。生命科学、ヒトの発生を知らない人には議論できない」というような論調でした。私はやはり、そうではない、こういう問題はいずれ社会全体に大きな問題を及ぼすので、哲学、倫理、宗教、あるいは社会生活の様々な問題に通じた人たちが議論に参加すべきだ、そういうふうに思っています。

ノンフィクション作家の最相葉月さんはずっとこの活動を取材して、優れたレポートを書いて来られました。『文藝春秋』（二〇〇四年四月号）に載ったものを紹介しましょう。最近も政府が教育基本法とかの公聴会をやると、参加者の質問がやらせだというのが出ています。この問題でも公聴会のようなシンポジウムをや

ったのですが、お役所側がその関係の人を呼んで意図的に質問するというようなことがありました。最相さんは、三十数回に及ぶ専門調査会の討議にどういう人がどのくらい出席して、何回発言したかというのを調べた。誰が熱心に議論したかということが一目瞭然です。しかし、みな一票をもって投票した。ほとんど出席していない人がいつまでも委員にとどまったり、投票のときだけ来たりしている。そういうことが露わになりました。きちんと議論をしようとする姿勢が、政府には欠けていたという話です。

以上、私は当事者ですので、批判するという立場で参加していましたので、厳しい見方をしております。しかし、おそらく医療関係の人の中にも「ああいう議論の仕方では困ったな」と思った人が少なくなかったことでしょう。研究を進めたい人も、しっかり議論をしてくれないと、これはよいことをしているのだという自信をもって研究ができないわけですから、私と立場は違っても、こういうやり方ではどうかと思っていたはずですよ。

3. 危機の内実と文化の差異

最初に、いま危機の時代なのだ、人類が作りかえられてしまう可能性を考えなければならぬ、そういう恐れが高まっているのだと言いました。では、それにどういうふうに向き合ったらいいのか。ここで文化の違いという問題が出てきます。国連の討議に関わって申しましたように、カトリック系の国では、こういうことはやってはいけないのではないかという意見が強い。西洋でもプロテスタント系の国は、どっちかというとと認めると言っている。東アジアの国は儒教や仏教、あるいは神道とか道教の国ですが、あまりこういう問題に対して議論が盛んでない。そうすると、欧米ではカトリック教会が反対するので、長い時間をかけて議論をしなくてはならない。その間に、ユダヤ教のイスラエル、シンガポール、中国、韓国、日本、こういうところがどんどん先に行ってしまうのではないかと、こういう不安をもつ人が増えている。

フランス・フクヤマは日系人で、教養的には西洋

の学問を熱心にやっていたので、アジア文化に対して、それを継承しているという感覚のほとんどない人ですが、彼はこういうふうに言っています。「たとえば、アジアでは、西洋で理解されているような宗教——つまり、超越的な神に由来する信仰体系を持つ宗教——がない国が多い。中国で支配的な倫理体系は儒教だが、これには神という概念がない。老荘哲学や神道はアニミズム (animism) である。動物 (animal) と生きていない (inanimate) 物質の双方に霊的な性質があると見なしている。仏教では人間と自然の創造を単一の宇宙と融合させる。……フランス・ドゥ・ヴァールが指摘するように、アジアの伝統では人間と非人間の本質を連続したものとして見るため、人間以外の動物により深い同情を寄せる。しかし、これは裏を返せば、人間の生命の聖性に十分な敬意が払われないこともある」(『人間の終わり』)

キリスト教では、被造物の中で、人間だけが神の似姿で特別な靈魂を持っている。被造物というのはいすべて神によってつくられた。神が絶対です。そして、被

造物というのは物や生物の世界ですが、その中で神の似姿の人間は、神から与えられた靈魂があるので、非常に尊い。尊厳をもっている。だから、人間というのは他の生物と全く違う重要な地位がある。こういう考えがキリスト教のなかにあります。しかし、アジアにはそれがないではないか。六道輪廻といえ、人間はまた動物になる。衆生という語が示すように仏教は人間と動物を区別していない。殺生というと、人間を殺す意味もあるが動物を殺す意味もある。それどころか、草木国土悉皆成仏とか山川草木悉有仏性というように、物にも魂がある、草木にも霊がある、山や川にも仏性があると考える。こういう考え方になると、人間が特別だという考えはあまりないではないかということです。

「仏教では、人間と人間以外の自然を区別せず、ともに断絶のない宇宙の一部と見なしている」。これはそのとおりでしょう。仏教の中にもいろいろな流れがありますが、すべて縁起でつながっていて、仏のいのちというのはあらゆるところに行き渡って、宇宙全体が

仏様のいのちだという考え方も日本の中では強い。「キリスト教と比べた場合、仏教、道教、神道のようなアジアの諸伝統は、人間とそれ以外の被造物との間に明確な倫理的区別を立てない傾向がある」。そうすると、動物でやっていいことを何で人間でやってはいけないのか、こういう問いが生じる。

フランス・ドゥ・ヴァールというのはサル学の有名な科学者ですが、彼が指摘するように、東洋の伝統では人間性と人間以外の自然の間を連続したものと見る。仏教は確かにそうですね。もちろん、人間になったからこそ仏の教えに従おうとすることができるので、仏教でも人間になるということは非常に意義深いことです。しかし、いま生きている人間も元は動物だったかもしれない。また、我々は動物に生まれ変わるかもしれない。そういうことです。あるいは十界互具みたいな考え方、一念三千みたいな考え方をすれば、人間の中には動物の要素もあるし、物の要素もある。地獄の要素もある、仏の要素もあるということになります。それは、人間だけを特別視しないということです。し

たがって、人間以外の動物により深い同情を寄せる。

しかし、とフクヤマは言います。これは裏を返せば、人間の生命の神聖性を軽んずることになる。人間の生命の神聖性というのはカトリック教会が強調する考えで、人間の命は受精された瞬間からもうそこに魂が入っている、神の似姿がそこにあるので絶対に神聖なのだ、これを破壊するなどんでもないという議論になります。もちろん、妊娠中絶は殺人に等しい。それに對して、人間の生命に敬意を払う度合いが東洋では低くなるであろう。アジアの多くの地域で、実際に中絶や幼児殺しが容認されてきた。特に女の子を中絶する場合によつては間引きをするということが広がっている。こういうふうなフクヤマは議論している。西洋と違う文化が危険だと言っています。

こういう問題に立ち向かうにはどうしたらいいか。今度はレオン・カスの著作をのぞいてみましょう。レオン・カスは別に東洋の文化を批判しませんが、いまの生物学はこういう問題に答えることができるだろうか。恐らく駄目だろう。生物学は本当に生命を生命と

して扱っていないというか、取り上げることができない。宗教の次元や、人間にとつての生命という問題を組み込んだような生命観がなくてはいけない。そのときに西洋では、やはり哲学、ギリシャ以来の哲学やキリスト教があるではないか。そこへ返りましょう」という議論をしています。

「私たちが早急に必要としているのは、もっと豊かで自然な生物学と人間学である。魂と肉体の特殊な統合体である人間の意味を、きちんと説き明かしてくれる学問が必要なのだ」(『生命操作は人を幸せにするのか』日本教文社、二〇〇二年)。「魂と肉体との特殊な統合体」というところに、すでに西洋的な考え方が入っていますが、それを説明してくれるのは西洋の哲学や聖書の伝統だ、と。この人はユダヤ人ですから、聖書というときにはユダヤ教とキリスト教が繋がった世界を考えています。「そもそも肉体と魂は、取るにたりないものが、神聖なものへの希求と結ばれ、具体的な形になったものなのだから」。つまり、魂を大事にするには肉体も大事にしなければならない。そのことを従来の西

洋の宗教や哲学はどう教えていたか。それを本気で考えなくては、いま取り組んでいる生命倫理の問題は簡単に答えられない。そういうふうに言っています。

これはかなり正しいと思いますが、しかし、西洋の哲学と宗教だけと言われると、ちょっと困るなという気がします。「こうした議論を探していくとき、私たちは近代以前の源泉、哲学と聖書から助けを得られるだろう。たとえば、アリストテレスからは……」云々となっています。つまり、西洋思想の源流まで返って考えなければいけないと。それはいいことだと思えますが、いや西洋の思想だけではなくて東洋の思想もあるし、世界中の様々な考え方を参考にすると言ってほしいというのが私の考えです。

こういうふうに考えると、こういう問題は単に専門家が考えたのでは足りなくて、文化の力が必要です。どういうふうになが生きているのか。どんな価値をもっているのか。何が大切なのか。どういうことをしてはいけないのか。どういう人生に意味があるのか。こういうことまで遡っていかないと、医療技術で何をし

ていいかどうかという判断はできない。ある種の生命倫理の問題というのは、人類の未来がかかっていることであり、そのためには我々の価値観の全部が関わっている。そうすると、当然宗教へ行く。その宗教というのは、人類の様々な宗教であるはずです。

しかし、世界の議論を見ていると、圧倒的に西洋の影響が強い。こういう問題に長く取り組んできたのは西洋であり、宗教の側も科学者の側も、西洋の中で長いことなされてきた議論の枠で考えている。その中で一番重要な論題の一つは、中絶の問題です。西洋諸国では、人工妊娠中絶を認めるかどうかということが非常に重要な国論を分ける問題で、国政選挙のときにも考えたりする問題です。

これは女性の生き方にも関わっていて、一方の立場はプロチョイス (Pro-choice) といって選択権尊重派。妊娠するかどうかは女性の問題である。妊娠といっても、望まない妊娠がある。望まない妊娠が起こってしまった場合、女性は自分の責任だと感じるけれど、実際は様々な理由があります。男のほうに責任があることが

多いです。二人とも失敗したということもありますでしょう。しかし、そういうことが起こると一番苦しいのは女性であります。だから、最後は女性が決めるのだというのが選択権重視派ということです。女性には生むか生まないかを決める権利がある。これは人権派の基本的な問題提起です。

一方で、人権といっても、いのちを破壊する権利はないのではないかという立場があります。妊娠して受精卵ができたとき、卵子と精子が合体としたときから、そこに新しいいのちが、一人の人間がそこにいるとすると、それを破壊するということは殺人に等しい。いまは超音波で写せば姿が見える子ども、体は小さいとしても人間の形をしている。そういう存在を殺めるということは許されませんというのが生命尊重派です。それをプロライフ (Pro-life) といっています。共和党は圧倒的にこのプロライフが多くて、民主党はプロチョイスが多い。しかし、もうアメリカでもフランスでもイギリスでもドイツでも、西洋キリスト教圏の諸国でこの対立が重大な問題です。

この枠組から見ると、アジアはこんな議論の仕方は

あまりしないということです。つまり、アジアにはプロライフ派が非常に少ない。つまり、人間の生命は決定的に大事だという感覚がないから妊娠中絶の反対も行わない。フクヤマのような人に言わせると、そういう国々のやりとりにさせたら、とんでもないことになる。こういう議論になってくるわけです。ですから、ここでは議論が「文化の違い」と関わってきます。

しかし、ここで考えなければならないのは、人間の尊厳ということを西洋で考えられてきたやり方だけで考えなければならないのだろうか。世界の人類が納得するようなやり方で考えなくてはならないのではないのか。これはまた非常に難しい問題です。だから、現在我々が直面している困難は、科学をどうやって止めればいいかわからない。人間の欲望に従って進む科学技術をどう制限していいかわからないという困難があると同時に、もし制限するとすれば、どういう基準によってやるのか。そのことが宗教や文化によって違うので合意が得られない。そういう問題でもあるというこ

とです。

4. 生命の価値と文化の多様性

我々は、西洋の文化や価値観からやってくる疑念にどう答えるか。アジア人は生命を尊重する一番大事なポイントが抜けているのではないか。だから、こんなに中絶が多い。あるいは、江戸時代には間引きといって子殺しもやっていた。これは日本だけではなくてアジアはそういう傾向がある。そういう問いかけです。もちろん、欧米でも近代以前はそういうことが行われていたと思われる節がたくさんあります。ただ、フランススコ・ザビエルが日本へ来てカトリック教会が日本へ布教したときには、日本には間引き（嬰兒殺し）、堕胎が多いという報告をしています。カトリックの側は、教会に子どもが捨てられるようにして、何とか子どもを救おうとしています。

それでは日本は中絶に許容的なのはなぜだろうか。中絶反対の人はいると思いますが、大きな運動にならない。政治問題にならない。なっても、それほど影響

が大きくないということがいえる。では、フランシス・フクヤマが非難していたように、中絶をするような社会は人間の尊厳という観念が弱いのではないか。人間の命の尊さという観念が弱いのではないかという議論に対して、どう答えるか。西洋の議論のように、人間は動物より優れている、人間は様々な動物より優れているので尊厳がある。神の似姿である。あるいは人間だけが理性をもっている。理性がなくなった人間は、人間としての資格が少し落ちていると。そうはつきり言わないけれども、それに似たような議論が時々なされます。だから、欧米でも中絶をしてもいいというプロチョイス派の議論も、「まだ意識がない人間は、人間が人間である資格を付与する理性をもっていないではないか」というのが論拠になる。こうなると、意識のなくなった人間は人間ではないのかということになつてくるわけです。そういう議論が、アメリカあるいは欧米ではなされている。

こういう問題に対して、日本からどういふ答え方ができるだろうか。こういうことがいま問われている。

こういう問いは我々人文学者、社会学者が答えなければならぬ問題です。宗教団体も、こういう問題にぜひ取り組んでいただきたい。一人ひとりの市民もそうです。しかし、なかなかまだそれが熟していない。

こういう問題を考えるには、ただ理屈だけを言っても足りない。いま宗教教団はという話をしましたが、同じ宗教だからといって同じ意見になるでしょうか。家族など自分の周りにパーキンソン病の人がいるという方は、ぜひ研究を進めてほしいと思うかもしれませんが。あるいは、自分は子宮がんで苦しんだ、子どもができなかったという人は、お母さんに生んでもらってもいいんじゃないかと思うかもしれない。人によって経験が違ふし、考え方も違ふし、価値観もそれぞれ違います。ですから、同じ宗教だからといって一つの答えにならなきやならないということはない。本を読んで、机の上で考えていればいいかというと、そういうものでもない。つまり、真剣にそういう問題にぶつかって悩んだ人の経験と照らし合わせなければ、本当に意義ある答えはでてきません。

中絶の問題ですが、私の生まれた世代は後の世代からちよつと嫌われておりますが、団塊の世代であります。団塊の世代というのはとても多く、一九四八年生まれの私の学年は小学校六年生のとき十四組ありました。一クラス六十人ぐらいです。同じ学校にこの間行つてみたら、いまは二クラスやつとです。戦争時代は子どもをつくれと言われてつくつてきた。そして、たくさん若者が亡くなつて何とか平和になつて、また子どもがたくさんできたということです。しかし、人口がこんなふうが増えていつて大丈夫だろうかということが疑問に思われた。そこで優生保護法、いまの母体保護法というものができて、これで中絶が認められるようになった。優生保護法指定の医師というのがあつて、普通の産婦人科医であまり問ひ詰められることなく中絶ができるようになりました。これは世界的にいうと早い。というのは、近代国家はどこも中絶を禁止してきたからです。

しかし、ここで考えなければならぬのは、なぜ中絶を禁止したのだろうか。どんな命も大切だという考

えが強かったからでしょうか。昔の人は子たくさんそんなに心配しなかった。隣り近所や親族が助けてくれた。そういうことでしょうか。私は別の理由があると思います。というのは、近代国家はとにかく人口を増やすことを急いでいる。子どもを増やして軍隊を強くしたり、生産力を上げたり、国力を強くする。そのために子どもがたくさん生まれるように仕向けた。キリスト教でも旧約聖書には最初に「生めよ増やせよ」と書いてあつた。これは生命尊重の教えであるとともに、ユダヤ人が勢力を増したり、キリスト教が広がつていくのにつごうがよい教えでした。

いま我々は人口問題というのを強く意識しています。しかし、人口問題はいま起こつたことでしょうか。同じ場所にたくさん人がいると、みなが生き残れない可能性があるという知恵は古来ありました。そういう中で、中絶というのが行われてきたわけです。それに対して、近代になつて中絶を厳しく禁止した。そして、増えた人口はどうなつたかということです。産業に使う、消費の力も出てくる。と同時に、海外へ出て行

ったわけですから。西洋の発展の時期というのは、植民地をつくる時代でもありました。世界中に大英帝国の拠点があつて、イギリス人は世界中に出て行つた。あるいは、イギリスのすぐお隣りのアイルランドというのはいま小さな国ですが、世界中に今の人口の何倍ものすごい数の人が出て行っています。イギリスの支配下で苦しんだアイルランド人が移住しました。そういうふうにして、世界の土地を取ってきました。

日本もそれをまねて韓国も征服し、植民地にし、満州も属国のようにしようとした。我々の子どもたちに教わつたことの一つですが、日本は狭い国土で資源もない、どうやってこの国を運営していくことができるか。何とか工業や貿易でやらないといけない。しかし、戦前の考えは、それだけではとてもたないもので、資源のあるところ、西欧諸国が大体いいところは取ってしまったから、まだ残っているところを取ろう。そういうことで、太平洋に出て行ったりアジアに出て行ったり、あるいは移民を新大陸に送ったりした。

そういうふうな人口を増やして近代国家をつくるの

を宗教は応援してきました。それは宗教の勢力拡張にもなるし、そして国との協力もできる。国も喜ぶし、宗教団体も喜ぶ。そういうことがあつたのです。だから、中絶を禁止するということは単にきれいな生命尊重の事柄だけではない。勢力を増やす、拡張するといふ要素がある。この話は、とてもいやな話です。いのちを大切にすること、宗教が教えることは基本的に間違っているはずはないのです。しかし、少し距離を置いて見ると、宗教の中には「いのちを守る」と言いながら戦争に協力したり、自分の勢力を増すために人の土地を取つてくるといふようなことがしばしばあつたということも考えなくてはいけません。

アジアの諸国は人口が多いです。欧米諸国から帰つて日本へ来ると、何でもこんなに人が多いのだらうと圧迫感を感じます。大体、家が小さいですよ。あんなに込み合つて暮らしている。そういう国で、二DKで子ども三人といわれても困るよというのが私どもの若いころの印象でした。そして、うまく避けられなければ中絶する。似たようなことは多分、昔の村でも、次

男坊に土地を分けようと思うと大変だ、三男坊に土地を分けられない、土地を分けられないで養子にも出せないならば結婚もできない、こういうことがあった。その中で、中絶とか間引き、「間引き」というのは作物の間を抜き取ってしまつて数を減らすことです。木の枝も切ったりします。本体が生き延びるためには、部分を減らしたりする。それを人間にも比喩的に当てはめたのが間引きということです。決していいことではありませんが、しかし、いのちがつながっていく、その「種」のいのちをつなげていくためには、同じ世代を横に広げすぎてしまうことを止めようとした。

そういうこともあると思うので、決していのちを軽んじたということではなくて、別の意味でいのちを重んじてきた。人口問題をいま我々が考慮するということは、決していのちを軽んじて人口を減らせといっているわけではなくて、人類が生き延びていくためには、「ただ、子どもを増やす」という考えを変えなければならぬ。そういうことで、人口調節をしようとしているわけで、そういう立場は決して現代に初めて出てき

たのではなくて、ずっとあった。これが中絶の背後にある考えだとすると、いのちを軽んじていたとは必ずしもいえないのではないか。

そういうことをさらに深めて考える手がかりに宮沢賢治のお話をします。宮沢賢治は児童文学、童話の作家であります。同時に国柱会という日蓮仏教の団体に入っております。彼の作品は法華経や日蓮の思想がベースになっている。そして、常に弱い者のいのち、弱い者を虐げようとする我々の本性といえますか、すぐ驕り昂ぶる我々、そして弱い者を苦しめてしまう、そういう我々のあり方からどうやって抜け出していけるかを考えていた。宮沢賢治はベジタリアンでした。童貞でもありました。ですから、欲望を自ら禁じる。お父さんは熱心な浄土真宗信徒でした。浄土真宗は、自分が弱いんだから戒律なんか守ることはできないという立場ですが、それに対して宮沢賢治はベジタリアンとなって動物のいのちも大切にしました。その宮沢賢治の考え方を参考にするので、欧米の立場とは違う生命倫理の考え方とは何だろうということが考えられる

のではないか。

たとえば、宮沢賢治の童話で、「なめとこ山の熊」という話があります。小十郎という獵師がおり、熊の獵をして生きている。年とったお母さんと一緒に暮らしていて家族は他にいない。熊を殺しているのですが、熊を殺して喜んではない。熊の気持ちがわかるので、いつも申しわけない、悪いなと思っている。時々、熊の言葉が聞こえているような気になる。そうすると、小十郎は熊にこういうふう言う。「熊、おれはてまへを憎くて殺したのではねえんだぞ。それも商売ならてめへも射たなけあならねえ。……てめへも熊に生れたが因果ならおれもこんな商売が因果だ」。こう言われても、殺されては困るよなと思います。しかし、少なくともそういう気持ちはもっているということです。

時々、小十郎は熊の言葉がわかるような気がする。人間と動物は違いますが、ふつと連帯することがあるということです。そのときは熊の体から後光がさすように見える。熊のほうも、小十郎の気持ちがわかるので小十郎に約束を守る。あるとき確実に仕留められる

と思った熊が、小十郎の前に手を挙げて出てきて、こう言った。「もう二年ばかり待って呉れ、おれも死ぬのはもうかまはないやうなもんだけれども少しし残した仕事もあるしただ二年だけ待ってくれ。二年目にはおれもおまへの家の前でちゃんと死んでゐてやるから。毛皮も胃袋もやってしまふから」。ちょうど二年後、この熊は家の前で死んでいた。ですから、約束を守る熊ということですよ。

小十郎は動物に対して強い立場にいる人間ですが、しかし、人間社会の中ではひどく弱い立場に置かれていて、取ってきた熊は商人に買ったたかれる。軽蔑されている。日本では昔から殺生は禁止されていて、動物を殺す職業も差別された時代もあります。そういうことで、小十郎自身が苦しんでいる。最後の場面ですが、小十郎は鉄砲を撃ち損なって熊に殺されます。ここで小十郎は死にますが、死後の世界が見えるような感じになっています。「しまった」と思ったときには、熊が襲いかかってきた。頭が「があん」となって、意識が失せようとする。そういう場面の中で、「それから

遠くで斯ういふことばを聞いた。『お、小十郎おまへを殺すつもりはなかった』。もうおれは死んだと小十郎は思った。そしてちらちら青い星のやうな光がそこらいちめんに見えた。『これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ』と小十郎は思った。『というのは、いままで熊を殺して生きてきたからです。』それからあとの小十郎の気持ちはもう私にはわからない。

三日後、熊は小十郎の遺体を山頂に置き、丸く囲み、静かに獵師の死を悼んでいる。熊は人間が好む悼みの儀礼を行い、共に生きた尊厳ある生きものを記憶にとどめようとしている。熊と人間は全然別物ではない。小十郎は人間として尊厳ある存在だった。だが、それは小十郎が熊の死を悼むときに記憶にとどめようとした「熊の尊厳」とまったく異なるものではないだろう。私が言いたいことは、これは「人間は動物より偉い」という考えではないのではないか。これは、熊を殺している話ですが、我々は中絶をして胎児を殺しています。アメリカ式の議論で言うと、胎児はまだ人間では

ない、理性がない、だから殺してもいいんだ。これは、西洋の考えです。

どうも私は、仏教とか日本人の考え方では、「いや、罪なんだけれども、罪を犯さざるをえない人間なんだ。殺生していけないんだけど、殺生して生きている我々なんだ」、そういう感覚に近いと思う。だから、熊と小十郎の關係はそういうふうにもいえる。人間と熊は違う。差異を差異と認めたくえで、しかし、それは上下關係ではない。人間が熊の上に立つというのではない。人間は熊を殺して生きている。我々はそれで食べて生きているのです。だから、動物のいのちは低い価値である、質的にもそういうことになると言われればそれまでなんですけれども、それは決して動物の中に尊敬できるものがないと見なしているわけでもない。こういうふうな考え方ではないか。

仏教の考え方というのは、すべてのいのちを尊ぶ。しかし、我々はやっぱり人間なのでとくに人間を尊ぶ。そして、人間はいつも正しいことを行えればいいですが、しかし、行えないこともある。そういう中でどう

やって生きていったらいいのかということが、仏教的な考え方ではないか。そういうことが、宮沢賢治の考え方の中にあり、たぶん今日の生命倫理問題を考えるためのヒントとして出てきているのではないか。善と悪をきっぱり分けて、「善を行いなさい」と西洋の思想ではありません。ですから、「胎児を殺すことはいいことですか、悪いことですか」という問いが出てきて「イエスカノー」かになる。イエスにはイエスなりの理由があり、ノーにはノーの理由がある。

しかし、実はもっと複雑で簡単に答えの出てこない問題がある。一つのいのちを大事にしたいのだが、そうすると別のいのち、あるいは将来のいのちに問題が起こってくる。そのようなことを考えながら、どういうふうにこの問題を処理していくか。割り切ろうと思っても割り切れない悲しみや罪の気持ちが残る。これは、ここに何か答えがあるということで物語を出しているのではなくて、こういう問題を考えるには、人間が生きている、その生きる力を支えているものは何だろうか。それから、弱い生きものに対して、あるいは

弱い生きもの同士として共鳴する、約束も守るしついにはいのちも捧げるということになるわけですが、それは大乘仏教でいえば菩薩的な考え方になるかもしれない。そういう立場でこの生命倫理を考えていくとすればどうなるのだろうか。こういう物語からヒントを得ることができないだろうかというようなことを考えています。

重い問題であり、簡単に答えが出てくるものでもありません。少なくとも私のきょうの話は答えを出すことが目的ではありません。重い生命倫理の問題に直面して、文化の違いで簡単に答えが出せない状態にいま人類社会は困っている。その中で仏教や神道、あるいは儒教、あるいは日本の民俗宗教、いろいろな文化伝統を継承している日本です。そして、そこから生まれてきた芸術作品には宗教文化に由来する知恵が宿っている。そういうものを頼りにしながら、「こういうふうな考え方もあるのではないか」ということを世界に示していく必要がある。そう考えています。また、そういうことは決して専門家だけがやることではなくて、

市民自らが考えつつ、その議論に参加してほしい。常に関心をもって関わっていただきたい、そういう主旨でお話させていただきました。

（しまぎの すすむ／東京大学教授）

（本稿は二〇〇六年十一月十四日に行われた当研究所主催の公開講演会の内容に加筆いただいたものです）